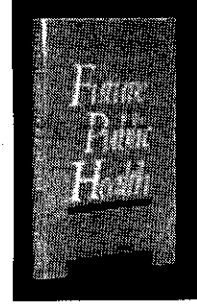


〈書 評〉

“The Future of Public Health”

23cm 225頁 National Academy Press, 1988



本書は“Committee for the Study of The Future of Public Health, Division of Health Care Services, Institute of Medicine”の2年にわたる活動結果の報告書である。委員は22名で委員のなかにはL. Breslowも含まれている。この委員会は6州を実際に訪問し、その実情を調べるとともに、数百名の関係者の意見を聴取してまとめられた。本文は160ページ余り、Appendixも含めて216ページ、各章末にはreferencesがふされ、しっかりしたmonographの形態をなしている。

全体の構成は、次のような6つの章から成っている。

- 1) The disarray of Public Health
- 2) A vision of Public Health in America
- 3) A vision of the Public Health System
- 4) An assessment of the Current Public Health System
- 5) Public Health as a problem-solving activity
- 6) Conclusions and Recommendations

第一章ではアメリカにおける公衆衛生の混乱(disarray)に対する問題意識と危機感が記されている。アメリカは公衆衛生の目標を見失ったため混乱している。一方、公衆衛生の課題は今なお多い。しかしながら、委員会の調査結果によると、それらに対する対策は不十分であり、またそのシステムは対処するための能力を備えていない。そして、緊急を要する公衆衛生の課題として1) AIDS, 2) 保健サービスを受けられない貧困者対策、また長期的課題として1) 事故, 2) 十代の妊娠, 3) 高血圧対策, 4) 喫煙と薬物乱用、また近年問題となりつつある課題として、1) 有害物質による環境汚染, 2) アルツハイマー型痴呆、及び3) 公衆衛生の再活性化をあげている。

第二章では、公衆衛生の使命とは何かをもう一度見直すことから始めている。公衆衛生がその使命を達成するためには政府の役割が重要であり、政府は1) 評価(assessment), 2) 政策立案(policy development)

3) サービスの確保(assurance)という基本的機能(core function)を持たなければならない。

第四章では実地見聞の結果に基づく委員会としての公衆衛生の現状認識が述べられている。地域はその特性のばらつきを考慮して選ばれた。その結果地域によって公衆衛生のシステムに、また資源の配分にもきわめて大きな違いがあり、州政府、特に地方政府には余りにもその能力差がある。またそのサービスの水準にも大きな差がある。例えば、ある地域では周産期の保健サービスは無料なのに、ある地域では費用が支払えないものは受けられない。また、保健従事者の給与も地域間で倍以上の開きがある。そのため、地域によっては保健従事者に平均勤務年限は2年程度であり、やる気を失っている。これらの結果は付録に詳細に記されている。

第五章はこれらの問題をどのように解決していくべきかが論じられている。公衆衛生は正にその成功の結果の被害を受けている。人々は健康に暮らせることを当然と考えている。また、政治家も一般の国民もAIDSのような当面の問題解決に注意を奪われ、地味な公衆衛生が危機に立たされている。特に、アメリカの場合には老人医療と医療保護の予算が多く活動を圧迫し、さらに財政再建のため1981年から連邦予算が25%削減され、危機は加速された。このような状況にたいして公衆衛生の使命と専門性の認識を高めリーダーシップを強め、政治家をはじめ国民の理解を得ることの重要性が強調されている。

第六章には結論と勧告がまとめられている。全体は極めて学術的で慎重な表現だが、明確に本質的なことを述べている。我が国の公衆衛生にも、今本書のような存在が必要だと思われた。

郡司 篤晃(公衆衛生行政学部)